

# 水

## がつくった 富山の歴史

私たちの暮らしになくてはならない「水」。しかし、ひとたび大量の水が河川に流れ込めば、恐ろしい災害を引き起こします。日本でも有数の急流河川をもつ富山県の歴史は、水との関わりを抜きに語ることはできません。水と闘い、水を治め、水を利用して、今日の富山県を築いてきた先人たちの英知と努力。美しい自然、そして私たちの豊かな暮らしの背景には、決して忘れてはならない歴史があります。

### 水の王国、富山県

富山県は「水の王国」。日本の屋根、海拔三〇〇〇メートル級の北アルプスに積もる雪は、天然の巨大な白いダムとなり、一年を通じて豊かで清冽な水を平野にもたらします。

富山の水の特徴は、水量が豊富だけでなく、適度にミネラルを含み、良質で淡泊な味であること。環境庁が選定した「日本の名水百選」には、全国最多の四箇所が選ばれています。



■富山県内の「日本の名水百選」

### 水がもたらす自然災害

しかし、水がもたらすのは恵みだけではありません。

江戸時代の著名な学者、室鳩巢が「越中百里山河壮なり」と称したように、富山県には東西九十キロあまりの県土に、黒部川、片貝川、早月川、常願寺川、神通川、庄川、小矢部川の七大河川をはじめ数多くの河川が流れて



います。これらの多くは、急峻な山岳地帯を流れくだつて短い距離で海へ注ぐことから我が国有数の急流河川となっており、古来、毎年のように洪水を繰り返してきました。

なかでも常願寺川は、安政五年（一八五八年）の大地震で源流域の大鷲山、小鷲山が崩壊、立山カルデラ内に流入した大量の土砂が土石流となって富山平野を襲い、大きな被害を与えました。富山県の歴史は、水との闘いの歴史といっても過言ではありません。



土石流で流されてきた安政の大転石。重さが約400トンもある。(富山市西番)

### 富山の水。そのうまさの秘密

**雪** 峰々に降り積もった雪が、夏でも豊かで冷たい水を供給してくれる。

**森** 本州第一位の植生自然度を誇る森林が、水を貯え、きれいにしてくれる。

**川** 日本一の急流河川が岩を噛んで流れて酸素を取り込み、清浄な水を運んでくれる。

**地** 平野を形成する扇状地の砂礫層は透水性やろ過作用に優れた花こう岩質を多く含み、適度にミネラルを含んだ良質な水をつくってくれる。

### 富山の水の人気広がる

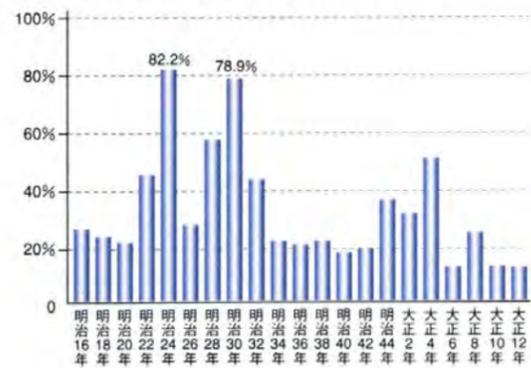
富山の水は、東京ディズニーランドでも販売されています。これは、日本航空のグループ会社「日航商事株」が、入善町で採取されたミネラルウォーターを商品化したもので、昨年四月の発売以来、四十万本以上の売上げを記録しています。最近では、このほかにも富山のミネラルウォーターが全国のスーパーやコンビニエンスストアなどで販売されるケースが増えました。美味しい水の産地としての富山県のイメージは、着実に広まってきています。



東京ディズニーランドで販売されている富山産のミネラルウォーター



■富山県の歳出決算額に占める河川費の割合



このような河川改修は、他の河川でも行われました。富山市の市街地付近で大きく曲流していた神通川のショートカット（現在の松川は、旧神通川の曲流の名残）、庄川と小矢部川の分離など、現在の富山県の河川の流れはこの時代に形づくられたといえます。また、農業用水の合口化は、黒部川、神通川、庄川などでも実施され、水害防止だけでなく、農業用水の取水の安定化にも役立ちました。

しかし、治水事業に要する費用は県の財政に重くのしかかります。明治時代、富山県の歳出全体に占める河川費の割合は平均で四十五％。洪水が頻発した明治二十四年には、八十二％にも達しました。県と同様に県民の生活も苦しく、多くの人々が新天地を求めて北海道に移住していきました。

しかし、治水事業に要する費用は県の財政に重くのしかかります。明治時代、富山県の歳出全体に占める河川費の割合は平均で四十五％。洪水が頻発した明治二十四年には、八十二％にも達しました。県と同様に県民の生活も苦しく、多くの人々が新天地を求めて北海道に移住していきました。

人々は、災いを福に転じた

やがて人々は、水を治めるだけでなく、電力資源として富山県の発展のために利用するようになります。

今からちょうど百年前の明治三十二年（一八九九年）、富山電燈会社が農業用水を利用した水力発電所を建設、北陸ではじめての電力事業を開始しました。これは家庭電灯用の発電でしたが、同社はその後神通川上流の庵谷に産業電力用の発電所を建設、電力の供給先として工場を誘致しました。

また、大正九年（一九二〇年）からは県営の発電事業も開始されます。これは、県が常願寺川水系で治水事業を行うかたわら水力発電所を建設して工業地帯に電力を提供し、その収益で治水事業の重圧にあえぐ県財政を立て直すというものです。「治水」「産業振興」「財政再建」に役立つ一石三鳥のアイデアでした。

安くて豊富な電力を求めて、伏木港周辺の工業地帯には多くの工場が進出し、大正時代の半ばまでには臨海工業地帯が形成されます。また昭和に入ってから神通川河口の富山港周辺への工場立地も進みました。

こうして、電力は富山県の工業化の牽引力となり、昭和十七年（一九四二年）には、工業生産額全国九位となるなど、日本海側有数の工業県へと発展していったのです。

INFORMATION

県が運行している「県政バス教室」では、先人達の英知と努力をしのぶ「常願寺川砂防ウォッチング」コースも用意しています。どうぞ、ご参加ください。

これからお申し込みいただける「常願寺川砂防ウォッチング」

コースの運行日	9/ 9 (木) 富山地区発 10/14 (木) // 10/28 (木) 高岡地区発
受付期間	9月運行分 6/30~7/13 10月運行分 8/2~18

問合せ先  
広報課 ☎ 076(444)3133



県営発電事業で建設された最初の発電所のひとつ松ノ木発電所(上)と中地山発電所(下)。現在は北陸電力の発電所として、当時の建物のまま使用されている。

富山県は 水との闘いから生まれた

五月九日は「富山県設置の日」。明治十六年（一八八三年）のこの日、富山県は石川県から分県独立しました。この富山県誕生のきっかけには、水との闘いが深く関わっています。

明治四年（一八七一年）の廃藩置県により全国に三府三〇二県が設置されましたが、この時に設置された「富山県」は、旧富山藩領（新川郡の一部と婦負郡）だけを区域とする小さなものでした。

その後「富山県」は「新川県」と改称され、明治五年（一八七二年）には現在の富山県と同じ区域を管轄するようになり、明治九年（一八七六年）、政府は全国を二府三五県に集約する大併合を実施、新川県は石川県に併合されてしまいました。

富山県成立までの変遷



しかし、併合後の石川県会（現在の県議会に相当）では、多大な費用を必要とする治水事業をめぐって、越中選出の議員と加賀・能登選出の議員とが鋭く対立しました。住民の生命を守るための治水工事優先を求める越中側に對し、加賀・能登側は道路建設を求めたのです。

明治十四年（一八八一年）、政府の緊縮政策によって治水事業に対する国からの補助金が廃止されると対立は頂点に達し、ついには県会の解散に至ります。

こうした中、越中国内には分県独立を求める声が急速に高まりました。入善の米沢紋三郎と富山の入江直友らは分県の建白書を太政官に提出。政府高官と面談し、分県を直接訴えました。米沢らはのたらしきにより、明治十六年（一八八三年）五月九日、太政官は富山県を石川県から分離する布告を公布。ここに、現在に至る富山県が誕生したのです。



分県陳情のため上京した米沢紋三郎(中)

分県の父  
米沢紋三郎 (1857-1906)

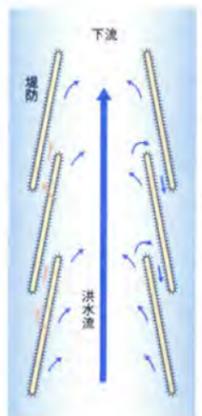
入膳村（現入善町）の豪農の家に生まれる。明治十四年に石川県会議員に当選。分県運動の高まりの中で分県建白の委員長に選ばれて建白書を起草。副委員長の入江直友らとともに上京し、右大臣岩倉具視、参議山縣有朋、内務卿山田顕義らに直接分県を訴えた。

富山県の設置後、最初の県会議員に当選し議長を二回務めたほか、衆議院議員にも選ばれた。

水との闘いは続いた

新たに誕生した富山県は、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケなどの指導を得ながら県内主要河川の治水事業にとりかかりました。

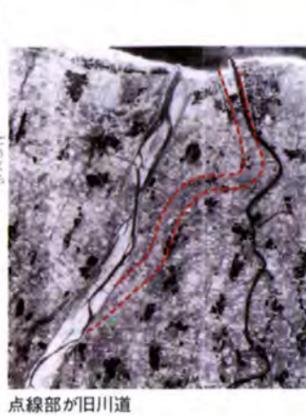
なかでも有名なのが常願寺川の治水事業で、この工事では、「放水路の開削と分流」「農業用水の合口化」「霞堤の築造」という、いわゆる「デ・レーケの三大工法」が採用されました。



霞堤の築造  
堤防を連続させずに水の流れと逆方向の開口部を設け、洪水の際は、流れの一部を遊水させて水圧をやわらげました。



農業用水の合口化  
全部で十二あった常願寺川左岸の農業用水の取水口を一つにまとめ、堤防を強化しました。こうして完成した常西合口用水は、現在では富山市の水道水としても利用されています。



点線部が旧河道

デ・レーケの三大工法

放水路の開削と分流  
河口付近に新しい放水路を開削して流れを直線化するとともに白岩川と分離し、水の流れをよくして洪水の被害を軽減しました。